

Title	10-13 世紀広州における南海神廟・南海神信仰研究の現状と課題
Author	張, 振康
Citation	人文研究. 70 卷, p.245-259.
Issue Date	2019-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	井上徹教授：大黒俊二教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

10-13世紀広州における南海神廟・南海神信仰研究の 現状と課題

張 振康

広州に位置する南海神廟は千年以上の歴史を有しており、それに基づく南海神信仰も珠江デルタ地域における最も代表的な海神信仰である。南海神信仰に関しては、国家祭祀、民間信仰、広州都市発展、海域交流などの諸点から研究成果が蓄積され、研究者の関心が次第に高まって来ている。本稿では、南海神信仰にとって歴史的な転換期となる10-13世紀に絞り、この時期の南海神廟・南海神信仰に関する先行研究を整理するとともに、この課題をめぐる関連史料の紹介を行うことによって、今後の展望を提示する。

キーワード：南海神廟 南海神信仰 広州 10-13世紀

はじめに

東・西・南・北にある四つの海いわゆる「四海」の形象は、すでに『山海経』にその一端を窺うことができるように¹⁾、南海神とは四つの海神の一つである。そして、南海神を祭祀する場所が南海神廟である。広州に位置する南海神廟は隋代に建立され²⁾、すでに千年以上の「海祭」が行われている、四海の神廟の中で唯一現存する海神の神廟である³⁾。南海神と南海神廟からは港市としての広州の歴史的発展の痕跡が残っており、海域的な歴史文化を有した広州に対する重要な表象だと言える。と同時に、南海神は東・南・西・北という四つの方向にある四海神の中でも極めて重要な位置に占めており、唐代の韓愈「南海神広利王廟碑」にある「考於傳記、而南海神次最貴、在北東西三神・河伯之上」（伝記を考証すると、南海神の位置づけは最も高く、北・東・西三神と河伯の上に居る）によれば、歴代の帝王からの加封が積み重ねられ、祭祀が盛んに行われてきた。さらに、南海神と南海神廟は盛名を馳せ、広州を中心とした珠江デルタ地区において南海神を分祀する神廟が散在している⁴⁾。すなわち、南海神は嶺南地域とりわけ嶺南の沿岸部における巨大な影響力を有する地域的な海神である。さらに南海神の信仰はその後、土着化・民間化して行き、「波羅廟」ともいわれるようになり、誕生日を祝う「波羅誕5）」が形成され、現在でも祭祀が行われている。以上のように、現在の南海神信仰、南海神廟には時代の変化、内外の諸文化の影響が考えられるのであり、これらの内、本稿では、10-13世紀の南海神廟・南海神信仰に焦点を当て、これらに関する研究状況と研究課題を整理し、最後に今後の展望を述べることにする。

一、南海神廟・南海神信仰研究の現状⁶⁾

1、南海神廟・南海神信仰研究の開始

南海神廟および南海神信仰を背景とした、広州の都市発展および広州をめぐる海域交流に関して、戦前より日本の学者は関心を注いできた。藤田豊八「宋代の市舶司及び舶条例」〔1917〕において、広州に奠都した南漢王朝は、その皇室の劉氏が広州に定住したアラビア末裔であるとの議論を提出し、当時の学界に大きな反響を引き起こすこととなった。⁷⁾これを契機に、東洋史学界において唐宋期における広州地区のムスリムへの注目が高まっていった。なかでも、桑原鷺蔵は『蒲寿庚の事蹟』〔1923〕において、宋元期東アジアの東南沿岸部における海域に着目して里程標的な研究成果を出した。氏は唐代以来の広東・福建におけるムスリムの群体に対して大量分析を行うことにより、唐から宋元にかけての東アジア海域世界における構造を整理した。

直接的な南海神廟と南海神信仰を対象とした研究は戦後に入ってから現れる。南海神信仰に関する最初の議論は日本で現れ、1960年代に発表された日野開三郎氏の「唐・五代東亜国民の海上発展と仏教」〔1964〕はこの時期における代表的な研究成果である。日野氏によれば、唐・五代期は海域交通の急速な発展に伴い、海難が増えたことにより、海への恐怖に基づく海神信仰は民間に広まっていく。海難の消除を図ろうとする民衆たちはその期待を海神に委ねていった。こうした背景に基づき、南海神は航海保護神としてみなされるようになった。さらに、この時期の仏教にも航海者によって海難退散という願望が賦与されたため、海神信仰が仏教と関係するようになると日野氏は指摘している。この論文は、仏教と海神信仰に関して個別に分析がなされており、両者の相互関係に関してはまだ検討する余地が残るが、この研究は明清以前の仏教と海神信仰へ目を向けた唯一と言って良い研究である。その後、南海神信仰と仏教の関係性についての論考が出されておらず、日野氏の提示した研究課題は未解決のままとなっている。

2、珠江デルタ地域における南海神廟・南海神信仰研究

1980年代の中国大陸における改革開放の情勢とも相まって、学術研究とりわけ歴史学研究の各領域も量的、質的な面において急速な発展が進行していく。こうした気運に乗じて、南海神廟および南海神信仰の研究も南海神廟の所在地広州で開始されることとなった。1985年に雑誌『廣州文博通訊』〔1985〕に、韓愈「南海神広利王廟碑」や劉斧「広利王記」などの史料を収録した『南海神廟』特集の増刊号が設けられた。それは南海神廟史料に関する最初の収集・整理である。また、この特集に曾昭璇・曾慶中「南海神廟の歴史と地理」〔1985〕と龍慶忠「南海神廟」〔1985〕という二つの論文も収録されている。前者は歴史地理学的視点で南海神廟周辺地域の歴史の変遷を考察しており、後者は広州の南海神廟に関して概観している。この特集に、

はじめて南海神廟が独立した課題として取り上げられた。まもなく1987年『広州文博』〔1987〕に黄鴻光「南海神信仰之六侯之記碑弁偽」〔1987〕という南海神廟の現存石刻を対象とした論文が公表された。この論文には、「六侯之記」という石碑の碑文内容は宋代に出来上がっていたとはいえ、碑文それ自体は明代に作られた偽物であるという結論が出された。これ以降、「六侯之記」の碑文の真偽をめぐる論争が何人の学者によって展開されて行った。

珠江デルタ地域に属し、広州の隣にある香港には、南海神信仰が現在に至るまで流行している。そのため、南海神廟・南海神信仰の歴史に関しては香港の学者も大きく関心を寄せている。香港の学者曾一民は1990年代に「隋唐広州南海神廟探索」〔1991〕を発表し、唐代以前の南海神廟の歴史、唐の張九齡兄弟と南海神廟の関係性、および唐の韓愈による『南海神広利王廟碑』などの問題に関して細緻な考証を行った。隋唐期の南海神廟を中心とした曾一民の「隋唐廣州南海神廟之探索」は、宋代の南海神廟研究にも前史的な意味合いにおいて様々な啓発的なことが述べられている。曾氏はここで南海神・波羅・達奚司空などの概念と相関関係を整理しているが、分析は不十分な段階にとどまっている。

以上のように、珠江デルタ地域においては、広州が南海神廟の所在地であるため研究が次々に現れるようになっていくが、この段階においては、広州地域史の視点で南海神廟を考察している。広州地域以外の学者が次第に南海神廟および南海神信仰研究に目を向けるようになるにつれて、研究の視角が多様になっていく。

3、南海神廟・南海神信仰研究の多樣的展開

1990年代から、南海神廟・南海神信仰に関しては、歴代朝廷による南海神冊封、海域交流と海神信仰、南海神廟をめぐる歴史地理、宋代以降の南海神信仰の変化など、多角的な視点で検討され、多様な研究が展開して行く。

① 朝廷による南海神冊封に関する研究

国家祭祀の枠組みに属する南海神祭祀は歴代の朝廷によって幾度となく冊封を受けたため、研究者はこの問題について目をむけて行った。古林森氏は『中国宋代の社会と経済』〔1995〕において「宋代の海神廟に関する一考察」という論文を書いている。朝廷の廟額・封号の授与政策、朝廷や地方官衙が主宰する国家祭祀と民間での民衆によるそれぞれの祠廟に対する信仰・祭祀との関係性について、東海神と南海神を取り上げて検討した。なかでも、南海神廟の特徴は、公認された正祠・官祭廟の役割を持つと同時に、民間での日常的な信仰の場としての機能をも有したとする。すなわち、南海神廟は所在地の地域社会と関連性を有し、当該地域の航海守護の神として民間庶民層の信仰を得ていたと述べたのであった。以上のように、国家と民間の両方の祭祀に目を向けた古林氏の論文の視点は首肯できるものであるが、民間における信仰の実態に直結する内容に踏み込んでおらず、検討の余地が残されることとなった。

黄淼章・鄭桂榮の「古代帝王對南海神的封號」〔2001〕は、南海神の封号および冊封に関する朝廷側の関連史料に対して整理を行い、南海神の冊封から歴代の王朝の南海神への態度の変化を検討している。ただし、封号に内包される意義や歴代の冊封からみられる歴史の意味などについて、深く論じていない。

森田健太郎の「宋朝四海信仰の実像」〔2003〕は、宋代国家祭祀における南海神賜号の意図について検討している。森田氏によれば、天妃信仰をはじめとする航海神の信仰圏が拡大する中、東海神とともに南海神は、官主導の「四海」信仰的性格を超える存在となっていた。しかし、航海神としての南海神は媽祖信仰と比べ、拡大が限定的であった背景に、宋代における排外的な政策が存在していたとする。具体的には北宋仁宋朝に広西を拠点に反乱を起こした濃智高の乱が朝廷の排外的政策を生み出し、その乱は「広州の歴史に影響を与えるだけでなく、中国王朝の四海信仰にも直接影響を与えた」〔森田2003, p.77〕と指摘する。

櫻井智美「元代の南海廟祭祀」〔2018〕は元代広州の南海廟における祭祀活動を分析することによって、中央政権の広州に対する政策と広州社会の変容を検討したものである。櫻井氏は、石刻史料を主として、岳瀆祭祀と比較しながら、元代の南海廟祭祀が国家祭祀の文脈においては「萎縮」ではなかったと指摘する。それは、貿易港としての広州を強調する下記の王元林氏の視点とは異なり、国家祭祀の視点から南海神廟の盛衰を捉えている。

上述の研究は歴代の朝廷による南海神冊封を通して、朝廷における南海神へ態度の変化を捉えていくものである。これらの研究は同時に官と民間という二つの次元で展開する南海神信仰の差異に目を向けることともなった。

② 海域交流と海神信仰に関する研究

媽祖や閩帝や八仙などの神形象に目を向けてきた二階堂善弘氏は、「民間信仰における神形象の変化について」〔2008〕において、民間信仰の視角より華光大帝と招宝七郎を例に取り上げて論じているが、南海神廟の達奚司空についても言及している。達奚司空の神形象が坐像から手を挙げて遠望する形になるというのは、招宝七郎や千里眼などの海と関連する神々の形象転移と関連性がみられると指摘する。いままで達奚司空の形象変化が注目されたが、その形象変化の原因を議論の俎上に挙げているのは二階堂氏の本論文のみである。

傳軼の「南海海神信仰文化研究——以南海神和媽祖為例」〔2009〕は、南海神と媽祖信仰との比較に重点を置き、南海神が官的信仰から民間的信仰へと変化する一方、媽祖信仰は民間から官的信仰に変化するという差異がみられ、それが媽祖信仰が後に南海信仰を上回っていく原因である、と指摘している。

高喬子の「南海神廟與海商」〔2016〕は、海商の視点から南海神信仰を分析した論文で

ある。この論文では、蕃客海商と広州地元の海商と二つのグループに分けて分析を行い、宋代広州の海商の出身地が多様であったことを明らかにし、そのことが南海神が地元の航海神という枠組みを超えて多文化的な色合いを有する海神信仰に変化していくことになったと結論づけている。

以上は南海神信仰と海域交流との関係性に注目する研究である。海域交流は主に民間で行われるため南海神信仰も航海神としての性格が前面に出てくる。さらに、広州をめぐる海域交流の展開は南海神信仰が民間信仰に転向する要因の一つであると捉えている。

③ 南海神廟をめぐる歴史地理に関する研究

陳典松は「広州南海神廟始建年代考」〔2001〕において、韓愈の「南海神広利王廟碑」を分析することによって、南海神廟の所在地が隋代の開皇十四年（594）に立てられた最初の神廟開立地ではなく、現在の場所に遷宮したのは少なくとも天宝十年（751）以降だと指摘する。

南海神廟の本廟（東廟）は広州城の外に位置するため、南海神廟と広州城の地理的關係性、さらにその地理性がいかに宋代広州の海域貿易に影響を与えたかについて、焦点を当てる論考は多い。この問題をめぐって王元林と趙立人との間に論争が起こっている⁸⁾。彼らの論争点は二つである。第一は南海神廟の所在地が対外貿易の港であったかどうかという点、第二が南宋期に広州をとりまく海域貿易が衰退しつつあったかどうかという点である。趙立人氏は、南海神廟の所在地は扶胥港にあり、すなわち当該期広州の対外貿易の窓口であり、当時の広州の対外貿易には衰退する気配は全くないという結論を下した。それに対し、王元林氏はまったく相反する意見を提出している。二人の論点はひとまず置くとして、以上の論争が展開することによって、広州の海域貿易研究、地理学的視点からなる都市研究に基づくいわゆる新たな研究視点の提起は、南海神廟研究に新しい可能性をもたらした。とくに歴史地理学との結合による研究方法の刷新には、二氏が大きく貢献をしたともいえる。

④ 南海神信仰の変化

孫廷林・王元林は「論宋代嶺南祠神信仰の新変化」〔2017〕において、宋代における南海神をはじめとする嶺南地域の祠神信仰の変容を考察することによって、国家祭祀の「正統性」的性格を持つ神格が嶺南地域の民間信仰の展開の中、それらの神格が朝廷に認定され、新たな「正統性」が付与されるようになることを明らかにした。さらに、こうした変容が、いわゆる「中原文明」が「嶺南文明」を変容させていく過程ではなく、「嶺南文明」を母体としつつ、礼樂文明が付加されて行く過程であると指摘した。

黄純艶は「宋代水上信仰の神靈體系及其新變」〔2016〕において、南宋期には水神的信仰の神靈大系が巨大な変化を遂げたと指摘する。なかでも、南海神の祭祀において、北宋期の「中祀」から南宋期に「大祀」になるという結論は、それまで南海神祭祀が「嶽鎮海

瀆」という「中祀」的祭祀体系の枠に属するという通説⁹⁾に大きく塗り替えるものである。さらに、こうした変化は宋代における官・民両方とも航海への依存度が高まるという海路交通の発展と密接に関係していると、指摘する。

以上の研究成果の通り、南海神信仰は宋代において、官から民へと信仰の中心が転移して行ったと概括することができる。

⑤ 南海神廟内に所蔵される石刻に関する研究

南海神廟には歴代石刻が所蔵されている。宋代中期から、南海神は人格化の傾向が強まっていく。唐代の碑文から唐代南海神の形象を考察するのはこの変化を検討する上で有益である。趙磊「唐韓愈撰『南海廣利王廟碑』研究」〔2015〕には、現存する唐代の石刻に対して分析が行われており、石刻が作られる具体的な歴史的背景に目を向けている。

上述したように、「六侯之記」碑文の真偽性をめぐる議論がその後も継承されて行く。現存の宋代石刻史料である南海神廟「六侯之記」は、達奚司空をはじめとする六人がいかに南海神の臣下になるかについての神話物語である。この石刻について王頌は「平波侯六——南海神廟『六侯之記』碑考論」〔2008〕において、宋代宣和六年から紹興五年にかけて『六侯之記』が成立したと述べる。

4、南海神廟・南海神信仰研究に関する王元林の論著

南海神廟・南海神信仰に関する研究は近年多様の展開を呈しおり、研究論文が量的に多くなってきている。しかし、この課題に関する深い検討がいまだに十分にされておらず、また個別な課題に詳細な考察があるものの、史料が限られていることなどの限界がみられる。そのため、南海神廟・南海神信仰の研究は論文によってなされており、専門論著が少ない。

王元林『國家祭祀與海上絲路遺跡』〔2006〕は現時点で南海神と南海神廟研究において最も全面的に論じた専門的著作である。王氏は国家的礼制と広州の港市の発展という視点から南海神廟祭祀の歴史の変遷をまとめている。南海神廟、国家祭祀と海上シルクロードの三者を結合させ国家礼制・海域通路・地域社会における南海神廟の役割を検討する。さらに媽祖信仰と比較しながら、南海神信仰は次第に官的信仰から民間的信仰へ、媽祖信仰は民間信仰から官的信仰へと、両者には異なる発展方向が示されることを指摘する。

そのほか、王元林『宋以後海洋神靈の地域分佈與社會空間』〔2016〕は、中国海域的神靈を対象としつつ、宋代以降の国家正祀と民間信仰との間にいかなる相互関係が有することについて論じた論考である。もともとの国家祭祀は次第に地方祠神信仰として受け入れられつつ、沿岸部の各地域で祭られた祠神信仰における「国家化」と「儒教化」を手掛かりに、国家における重層的な正祀系統と民間信仰レベルの系統との相互作用に議論の重点を置く。さらに民間信仰における長期的な社会文化的な積み重ねに基づく、沿岸部各地域の「社会空間」を見据えている。

王氏の論作では、歴代の南海神の状況が視野に入れつつ、南海神研究の各方面に関する課題にも言及する。氏による系統的な論述は、今後南海神廟・南海神信仰の全貌解明を図る研究者に対して示唆を与えるものとなっている。

以上の南海神廟・南海神信仰の研究の方向性は次のように整理することができる。①1980年代から進行する広州地域史研究。広州地域史的の視点においては、南海神廟と南海神信仰はつねに広州の都市発展および広州を取りまく海域交流などの課題と結合し、南海神信仰を広州の歴史においていかなる位置づけを有するか、南海神廟が広州の港といかなる関係性を持つのかを焦点に検討がなされていく。②国家祭祀研究の一環として行われる南海神研究。朝廷が行う南海神への冊封を通して、宋代の冊封と礼制の変容、さらに宋王朝の天下観・信仰宗教観などマクロの視点より、宋代の礼制の問題を考察していく。③信仰の側面から行う南海神信仰研究。これまでは主として日本の学者によって進められ、中国の学者が加わることで信仰の主体、需要性などの問題が検討されるとともに、南海神信仰において官的祭祀から民間信仰へという変化が確認されている。いずれにせよ、南海神信仰は宋代において大きな転換を迎えるという点において共通理解が存在している。

二、南海神廟・南海神信仰研究の課題

1、研究の概観と問題点

上述の如く、南海信仰・南海神廟研究には三つの方向性が存在している。以上の三つの方向性を結合させ、深化させて行くことが、現在の課題として位置づけることができる。確かにいままでに複数の視点から南海神廟と南海神信仰を考察した研究者が存在し、彼らの研究を通じて、南海神信仰が中央朝廷と地域社会において相異なる役割を果たしたことが明確化された。しかしながら、こうした研究は特定の時代、特定の時期の歴史現象を叙述するレベルでとどまっており、全面的且つ多面的に論じていく研究視角が求められる。例えば、王朝・地域の動向に目を向け、南海神信仰を考察する研究においては、民間信仰研究の方法論を併せ用いる必要がある。一方、民間信仰の側面方から展開する研究においては、広州都市史、いわば地域社会論や港市論や海外交易論を視野に入れていく必要がある。

2、史料と課題

今後の研究を考える上で、今一度立ち返るべきは史料である。基礎史料としては、『宋史・礼志』『宋會要輯稿・礼』『太常因革礼』『政和五礼新儀』『中興礼書』『玉海・郊祀』など宋代祭祀にかかわるものが挙げられる。さらに、元代の『大徳南海志』、明代の『成化広州志』と『嘉靖広州志』など、広州の地方志にも宋代広州に関して大量な記載が残っているため、宋代南海

神廟に関わる貴重な情報を提供してくれる。また、明清期にはすでに南海神廟に関わる「志」が存在する。例えば、明代の郭棐『嶺南名勝志』においては「南海廟」という章が設けられ、清代の陳蘭芝『増補嶺海名勝志』には郭棐の書いた内容に補充を行っている。さらに清代の崔弼『波羅外紀』もあげられる。これら明清期に成立したものには、ほかに見当たらない宋代南海神にかかわる史料があり、これらの明清時期の関連史料を視野に入れる必要がある。

10-13世紀は南海神信仰の転換期として位置づけられる。なぜ南海神信仰がこの時期において重要な転換を果たしたかを考察するに当たり、上述の基礎史料のほか、現存する南海神廟に残る石刻史料、当該期の文人による詩文類史料などを用いて検討を進める必要がある。ここでは関連史料について整理を行い、史料から見える、新たな可能性について述べることにしたい。

① 南海神廟・南海神信仰研究に関わる唐宋期の石刻史料

南海神廟には、唐宋以降残された歴代石刻が所蔵されている。広州に関する地方志などの記載は元代以前のものがすべて紛失したため、神廟内に現存する石刻は重要な史料価値を持っている。南海神廟の石碑は文化大革命時期において大規模に破壊されたため、現存する原碑は数少ない。幸いその前に、多くの碑刻は拓本が作られ、現在までその内容が保存されている。広東人民出版社による『南海神廟碑刻集』〔2014〕と陳錦鴻の『南海神廟文獻匯輯』〔2008〕には、現存する歴代の南海神廟の碑文を収録し、研究者に便宜を提供するが、この二書は、主に清代の阮元が著した『広東通志・金石略』に収録された碑文の版本に依拠したため、本来の碑文とある程度の差異が見られる。これらの文献史料は大きく分けると次の通りである。

一つは神廟の中に残る石碑であり、朝廷から南海神へ下された冊封詔書および関連記載がその内容である。現存する唐宋時代に南海神を冊封した記録は、唐天宝十年（751）南海神を広利王を冊封する「冊祭広利王記」、北宋康定二年（1041）洪聖を加封する「康定二年中書下牒」、北宋皇祐五年（1054）昭順を加封する「中書門下牒」、南宋紹興七年（1165）威顯を加封する「南海広利洪聖昭順威顯王記」である。同時に、慶元四年（1198）に宋代の朝廷から下達した「尚書省牒」から、この四つの冊封はすべて官側の行為だと確認できる。また「康定二年中書下牒」「中書門下牒」「尚書省牒」は朝廷が正式に発布した牒文である。この五つの文献には歴代の朝廷による南海神冊封の理由が述べられているため、南海神が中原王朝の祭祀系統における位置づけを考察する際に重要な参考史料となる。

題名	元号年	年	作者	内容紹介
冊祭広利王記	唐天寶十年	751	李邕	南海神を広利王に冊封する過程を記録する。
康定二年中書下牒	宋康定二年	1071		南海神をが洪聖広利王に追封する牒。
中書門下牒	宋皇祐五年	1054		南海神を洪聖広利昭順王に追封する牒。
南海広利洪聖昭順威顯王記	宋紹興七年	1165	陳豊	南海神を広利洪聖昭順威顯王に追封する過程を記録する。
尚書省牒	宋慶元四年	1198		南海神廟に額を賜る牒。

そのほか、南海神廟を立て直したり新築したりした後、慣例として石刻を作って記念する。現存する「大宋新修南海広利王廟之碑」「重修南海廟碑」「重修南海廟記」「創建風雷雨師殿記」「轉運司修南海廟記」の五つの石刻内容は、宋代南海神廟の廟宇の展開を見る際において重要な史料となる。特に、宋王朝は971年に南漢を滅ぼして嶺南を占領して建立した「大宋新修南海広利王廟之碑」から、宋代初年における、朝廷側の南海神への態度、および南漢時期の南海神信仰の状況を読み取ることができる。

題名	元号年	年	作者	内容紹介
大宋新修南海広利王廟之碑	宋開寶六年	973	裴麗澤	南漢を滅ぼし、南海神の祭祀を恢復し、宋王朝がすでに嶺南地域を征服したことを示す。
重修南海廟碑	宋治平四年	1067	章望之	南海神廟が老朽化したため、重修を行ったことを記述する。
重修南海廟記	宋乾道三年	1167	廖容	南海神廟が老朽化したため、重修を行ったことを記述する。
創建風雷雨師殿記	宋乾道三年	1167	康與之	風雷雨師の位置づけを明確にするため、専門的殿を建設する。
轉運司修南海廟記	宋寶慶元年	1225	曾噩	南海神廟が老朽化したため、重修を行ったことを記述する。

南海神関する伝説を記す石刻、「洪聖王事蹟記」「六侯之記」「南海廟達奚司空記」もある。「洪聖王事蹟記」は現存しており、南海神の「顯靈」（権現）に関する記載が見られる。「六侯之記」は南海神の部下がいかに封侯されたかを記す神話的文章である。なかには、助利侯の達奚司空、助威侯の杜公司空、濟応侯の巡海曹將軍、巡応侯の巡海提点使という四人の物語があり、神話的性格を有する。「南海廟達奚司空記」は上述した「六侯之記」に言及された達奚司空に関する伝説的な記載である。達奚司空に関する記載内容が「六侯之記」よりだいぶ拡充されていることから、達奚司空が次第に重要な位置を占めるようになって行く様子を窺うことができる。これは宋代の時期に仏教的要素が南海神信仰に融合していく画期的時期であることを物語ってくれる。南海神と達奚司空の両者は民間信仰の発展を考える上で重要な要素であり、相互の関係について、今後深く探求していく必要がある。

題名	元号年	年	作者	内容紹介
洪聖王事蹟記	宋熙寧七年	1074	程師孟	南海神に関する伝説。
六侯之記	宋紹興十五年	1145	方漸	南海神の部下がいかに封侯されるかという神話的文章。
南海廟達奚司空記			許得巳	達奚司空に関する伝説。

祭祀文は石刻の主要な文体の一つである。祭祀文は南海神祭祀においてよく用いられており、なおかつ広州の地方官員によるものが多いため、これらの祭祀文類の石刻には広州の地方官員による南海神への態度が読み取れる。

題名	元号年	年	作者	内容紹介
勅祠南海神廟記	宋至和元年	1054	元絳	碑文は「中書門下牒」として刻まれている。南海神の夫人が明順夫人という号を贈与されることを記述する。
勅祠南海神記	宋熙寧七年	1074	陳之方	嶺南を庇護する南海神への感謝を表す。
祭南海神文	宋紹聖元年-五年	1094 - 1098	章棗	嶺南を庇護する南海神への感謝を表す。南海神が叛乱を平定したこと、民衆を教化したことに言及。
祭南海神文	宋政和元年-宣和七年	1111 - 1125	王安中	嶺南を庇護する南海神への感謝を表す。嶺南地域への記述が各所に見える。

唐宋期の石刻には韓愈の「南海神広利王廟碑」（唐天和十五年・820）、程師孟の「南海廟程師孟禱雨記」（宋熙寧六年・1073）および蘇咸「南海廟謝雨記」（宋熙寧七年・1074）もあげられる。唐代の広州刺史である孔戣は南海神を祭るために、韓愈にこの文の作成を依頼している。碑文からは、唐王朝からみた南海神を読み取ることができる。また、当時の広州の歴史も叙述されている。このほか、唐宋期の石刻以外に、後世の石刻とりわけ宋代と近い元代に作られた石刻も宋代社会を考察する上で重要な史料となってくる。

② 南海神廟・南海神信仰に関わる宋代の詩文史料

上述の史料以外に、南海神および南海神廟に関わる宋代の詩文類史料にも目を向ける必要がある。それらの詩文史料は文人たちが広東にて官僚として働き、また遊歴する時期に南海神廟を訪れ書いたものであり、各種の文集で散見される。陳錦鴻の『南海神廟文献匯輯』は詩文を収載したものであるが、まだ収録されていないものも多い。今後の課題としてはこれらの詩文史料を網羅的に調査する必要がある。ここでは洪适・劉克莊・方信孺・蘇軾・楊萬里・李昉英らの残した詩文史料を概観しておく。

洪适^{かつ}（1117-1184）は饒州鄱陽出身であり、洪皓（1088-1155）の長男で、洪邁（1123-1202）の兄である。『宋史』巻373、洪皓伝によれば、「往來嶺南省侍者九載」とあり、洪适は父親に付き従って九年間に嶺南に来ている。父親の喪に服す三年間を加えてみれば、彼が嶺南に滞在した年数は十二年にもなる。『盤洲¹⁰文集』という文集が現存しており、その中には洪适が嶺南時期で書いた作品が数篇あり、南海神へも言及している。具体的には、南海神に嶺南地域の安泰を祈願する「祭南海神廟広利王文」、海賊を滅ぼして民衆を教化することを南海神に祈願する「禱南海神廟文」、南海神に家族の健康を祈願する「禱南海神文」、朝廷が章貢の動乱を平定できるよう南海神に祈願する「祭南海廟文」、嶺南地域の安泰および家族の健康のために祈願する「禱東廟文」、章貢の乱によって祭祀が乱れたことに対して南海神へ指示を求める「立夏東廟祝文」、南海神の西廟を修繕し直した後、南海神の指示を仰ぐ「奉安南海王文」、任期満了の際、嶺南地域への庇護について南海神を感謝する「辭南海神文」、南海神廟の隣にある浴日亭を描く「浴日亭」などの九篇の文章がある。

劉克莊（1187-1269）は莆田出身であり、広南東路潮州通判を担当した後、嘉熙三年（1239）に広東提挙になり、翌年広東転運副使を経て、次いで広州市舶司についている。広州で役職を務めた期間が長く、市舶司という海外貿易とかかわる官職を担ったことがあり、広州の海域交流とも密接に関係するため、南海神廟を重視する姿勢が見える。文集『後村先生大全集』には、南海神廟周辺の景色を描写する「謁南海神祠・一陣」、南海神廟前の扶胥という港とかかわる海路交通を描写する「謁南海神祠・暘谷」、南海神祭祀を描写する「謁南海神祠・前祭」、二月に民衆が南海神を祭祀する光景を描写する「即事・香火」、南海神廟の周辺において繁しく往復する船を描写する「即事・東廟」、広州地域の民俗を紹介する「即事・瓜果」、広州と北宋期の都の開封とを比較する「即事・吾生」、蘇軾の「浴日亭詩」の歩韻詩として作成した「浴日亭歩東坡韻」、南海神廟前の黄木湾を描写する「汎海」など九つの詩文がある。

方信孺は、興化軍（現在の福建省莆田）出身の人である。『宋史』巻395、方信孺伝には「以父崧卿蔭、補番禺縣尉」とあり、広州で「縣尉」の官職についていることが確認できる。著作の『南海百詠』には、広州各地の名勝に対する詩文が書かれており、さらに詩文の頭に該当名勝の歴史や地理などの紹介も付加されている。『南海百詠』において南海神廟にかかわる詩文としては、南海神廟に関して描写する「南海廟」、休谷禪師の道場靈化寺に関する描写および休谷禪師が南海神を授戒した伝説を述べる「靈化寺」、南海神廟付近の崗に関して描写する「相對崗」、南海神廟の対外水域である琵琶洲を描写する「琵琶洲」、南海神廟の対外水域である王登洲を描写し、南海神が人から神へ昇華した伝説を記載する「王登洲」、南海神廟の所蔵品の銅鼓を描写する「銅鼓」、南海神廟の前に植えられた波羅蜜という植物、およびその来歴を紹介する「波羅蜜果」、および南海神廟の隣にある浴日亭を描く「浴日亭」など八つの詩文がある。

蘇軾（1037-1101）は北宋紹聖元年（1094）に嶺南に左遷された。彼が南海神廟の隣の浴日亭で遊ぶ時、「浴日亭詩」という詩文を書いている。後世の人はこの詩文を石碑に彫り、石碑の詩文には、後の元代人による「記」一篇が付け加わえられている。浴日亭は神廟の隣にある小山に位置しており、その場所は今でも確認できる。後世の文人がこの碑を訪れた際に「歩韻詩」を創作したことも注目される。その他に、蘇軾が船で南海神廟前の黄木湾で遊ぶ時に書いた「朝市」という詩も残されている。

楊萬里（1127-1206）は、広東提點刑獄として赴任したことがある。「二月十三日謁西廟早起」という詩において彼は南海神廟の西廟の祭祀に出かけたことが述べられている。この詩に記載された祭祀の日付が現在の南海神誕と一致しており、2月13日に南海神廟で祭祀する習俗は南宋期にさかのぼることができる。また「題南海東廟」「汎海」という詩二首あり、いずれも南海神廟の東廟および東廟前の黄木湾への描写である。

李昉英（1201-1257）は、南海神廟の所在地広東番禺（現在の広州）出身である。外地

で歴任した後、宝祐三年（1255）に出身地の広州に戻り、晩年を過ごした。「別陳霆永福」という詩文は、南海神廟の隣の浴日亭で陳霆と別れることへの記述である。また「水調歌頭・題斗南樓和劉朔齋韻」を作り、南海神廟をはじめとする広州の名称旧跡で遊ぶ様子を記述している。

上述の詩文類史料は石刻類史料と異なり、日常生活に関する描写が多い。そのため、詩文史料は、南海神廟の民間信仰や風俗の諸相を窺うにあたって重要な価値を有する。

そのほかに10-13世紀の南海神に関する詩文が大量に残されており、これらをデータベース化しておく必要がある。現在、この作業を進めており、別稿にてその研究成果を公表する予定である。

おわりに

南海神廟・南海神信仰研究においては、上記の課題に基づき、以下の三つの新たな可能性が考えられる。

- ① 各歴史資料が語る南海神信仰には相違が存在しており、その多面性を明らかにするとともに、その相違の背景にある国家、地域社会、民衆それぞれの意識や都市社会、国際交易の構造など多様な側面を明らかにすることが必要である。例えば、南海神廟に残る朝廷が下した詔書や牒の石刻は、国家を守護する海神、あるいは航海神としての姿を浮き彫りにしてくれるが、「祭文」においては地域社会の守護神、あるいは民衆の安全や健康を庇護する神としての姿が現れてくる。歴史資料を全面的に調査することを通じて、南海神廟および南海神信仰の全貌が明らかになってくると思われる。
- ② 広州地域社会への視座が必要である。広州は中原王朝の管轄における周辺性、かつ対外的な海域交流における重要拠点という二つの特殊性を有している。こうした広州地域社会の特殊性を視野に入れることにより、10-13世紀における南海神信仰の展開・変容の実像を解き明かすことができるかと思われる。
- ③ 多文化融合の結晶として、南海神信仰を捉えることが必要である。10-13世紀は、国家祭祀、いわば官的信仰から次第に民間信仰に傾斜する時期であり、また同時に仏教の影響が信仰の中に現れてくる。同時に海外の文化、習俗が絶えず入り込んでくる広州地域における多元文化的世界の特徴にも目を向ける必要があり、これらの諸相を結び付け、南海神信仰の実態を解き明かすことが求められる。

【注】

- 1) 『山海經・大荒東經』に「東海渚中有神、人面鳥身、珥兩黃色、踐兩黃蛇、名曰禺虬。黃帝生禺虬、禺虬生禺京。禺京處北海、禺虬處東海、是惟海神。」と見え、『山海經・大荒南經』曰「南海渚中有神、人面、珥兩青蛇、踐兩赤蛇、曰不廷胡余。」『山海經・大荒西經』に「西海渚中有神、人面鳥身、珥兩青蛇、踐兩赤蛇、名曰傘茲。」と記載される。しかし、『山海經』に記載された四海神の形象は後世の四海神の形象と大きく差異を有するため、両者は必ずしも関連があるとは考えない。
- 2) 『隋書』卷7、禮儀志には「東海於會稽縣界、南海於南海鎮南、並近海立祠。」とある。
- 3) 一方、現在の東海神廟は幾度となく遷宮と重修を繰り返しており、歴史上の連続性があるかどうかについては疑問が残る。
- 4) 南海神廟という主廟のほか、南海神を祭祀する廟宇は下記の通りである。それは新滘鎮黃埔村洪聖廟・長洲鎮下莊洪聖古廟・大沙鎮茅崗村南海神廟・公坑洪聖廟・員村洪聖廟・火村洪聖廟・板橋南海神廟・崗尾南海神廟・凌邊觀音洪聖廟・香港灣仔洪聖古廟・滘西村洪聖古廟・南丫島洪聖廟・鴨脷洲洪聖古廟などであり、主に珠江デルタに散見する。
- 5) 現在南海神廟は「波羅廟」とも言われ、唐の時代にインドからの使者がここに「波羅蜜」を植えたことに由来する。そのため、南海神誕は波羅誕とも呼ばれて、南海神の誕生日（舊曆二月十三日）として、舊曆二月十一日から十三日まで民間において祭祀行事がおこなわれる。「波羅蜜」は梵文のパラミターの音写である。
- 6) 本稿では、10-13世紀の南海神廟・南海神信仰に関連する先行研究を整理していくが、同時に南海神に関する通説的研究および10-13世紀南海神研究と関連があるほかの時期の研究も視野に入れて行く。
- 7) 李景新1937「廣東之國際交通史」（『廣東文物・卷六・史地交通門』pp.23-24）；陳寅恪1939「劉復愚遺文中年月及其不祀祖問題」（『金明館叢稿初編』pp.365-366）；楊承志1943「廣東人民與文化」p.90；河原正博1948「南漢劉氏先祖考」（『漢民族華南發展史研究』pp.229-252）。
- 8) 論争は王元林「宋南海神東・西廟與廣州海上絲路」（『海交史研究』、2006年01期、pp.24-41）から始まった。王氏は趙立人の「古代廣州の外港・内港與南海東廟・西廟」（『嶺嶠春秋——海洋文化論集（二）』、pp.218-228、廣東人民出版社、1999年）における論点の誤りを指摘したのに対し、趙氏は「南海神廟史實辨正——與王元林先生商榷」（『海交史研究』、2007年01期、pp.59-65）を書いて応答した。それに対して王氏は「再論宋廣州南海神廟相關史實——答趙立人先生」（『海交史研究』、2008年01期、pp.12-25）でまた応答し、ついで趙氏は「續論南海神廟與扶胥港——再答王元林先生」（『海交史研究』、2009年02期）で王氏の疑義に対してを応答した。
- 9) 古林森廣1995『中国宋代の社会と経済』pp.112-136；王元林2006『國家祭祀與海上絲路遺跡』pp.98-216。
- 10) 盤洲は洪适の号である。

【参考文献】

1、単行本

日本語

桑原鷲藏1923『蒲寿庚の事蹟』、岩波書店

河原正博1984『漢民族華南發展史研究』、吉川弘文館

古林森廣1995『中国宋代の社会と経済』、国書刊行会

中国語

楊承志1943『廣東人民與文化』、國立中山大學研究院文科研究所、廣州

關履權1994『宋代廣州の海外貿易』、廣東人民出版社、廣東

陳寅恪2001『金明館叢稿初編』、三聯書店、北京

王元林2006『國家祭祀與海上絲路遺跡』、中華書局、北京

陳錦鴻2008『南海神廟文獻匯輯』、廣州出版社、廣州

廣州市文化局編2008『海上絲綢之路・廣州文化遺產・地上遺跡卷』、文物出版社、北京

廣州市文化局編2008『海上絲綢之路・廣州文化遺產・文獻輯要卷』、文物出版社、北京

- 李慶新2010『南海貿易與中外關係史研究』、中華書局、北京
楊萬秀主編2010『廣州通史』、中華書局、北京
黃兆輝·張菽暉2014『南海神廟碑刻集』、廣東人民出版社、廣東
廣東省文物局編2015『廣東文化遺產·古代宗教與泛神信仰建築卷』、廣東旅遊出版社、廣東
鄭佩琬2015『嶺南宗教信仰文化傳播之路』、廣東經濟出版社、廣東
王元林2016『宋以後海洋神靈的地域分佈與社會空間』、中國社會科學出版社、北京

2、論文

日本語

- 藤田豊八1917「宋代の市舶司及び船条例」『東洋學報』1917-05、pp.159-246
日野開三郎1964「唐・五代東亞諸國民の海上發展と仏教」『佐賀龍谷学会紀要』通号11、pp.1-29
森田健太郎2001「劉富と辛押陀羅—北宋期広州統治の諸相—」『史滴』23、pp.23-39
森田健太郎2003「宋朝四海信仰の実像」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第4分冊、49、pp.67-79
二階堂善弘2008「民間信仰における神形象の変化について」『東アジア文化交渉研究』創刊号、pp.179-186
櫻井智美2018「元代の南海廟祭祀」『駿台史学』第163号、pp.27-50

中国語

- 李景新1937「廣東之國際交通史」『廣東文物』卷六『史地交通門』pp.23-24
曾昭璇·曾慶中「南海神廟の歴史と地理」『廣州文博通訊』1985年增刊號、pp.1-5
龍慶忠「南海神廟」『廣州文博通訊』1985年增刊號、pp.6-28
黃鴻光1987「南海神信仰之六侯之記碑弁偽」『廣州文博』、pp.16-19
曾一民1991「隋唐廣州南海神廟之探索」『唐代文化研討會論文集』、臺北文史哲出版社、pp.311-358
趙立人1999「古代廣州的外港·內港與南海東廟·西廟」『嶺南春秋——海洋文化論集(二)』、廣東人民出版社、pp.218-228
陳典松2001「廣州南海神廟始建年代考」『廣東史志』2001年01期、pp.39-40
黃淼章·鄭桂榮2001「古代帝王對南海神的封號」『嶺南文史』第二期、pp.53-56
王頌2005「神王祭祀：廣州“南海廟”古史鈎沈」『西域南海史地研究』、上海古籍出版社、pp.1-18
王元林2006「宋南海神東·西廟與廣州海上絲路」『海交史研究』、2006年01期、pp.24-41
趙立人2007「南海神廟史實辨正——與王元林先生商榷」『海交史研究』、2007年01期、pp.59-65
王元林2008「再論宋廣州南海神廟相關史實——答趙立人先生」『海交史研究』、2008年01期、pp.12-25
王頌2008「平波侯六——南海神廟『六侯之記』碑考論」『西域南海史地考論』、上海古籍出版社、pp.92-109
趙立人2009「續論南海神廟與扶胥港——再答王元林先生」『海交史研究』、2009年02期、pp.75-88
傅軼2009「南海海神信仰文化研究」『海洋開發與管理』第26卷第11期、pp.84-87
曹家齊2012「海洋貿易與宋代廣州城市文化」『中國港口』中國寧波國際港口文化節專題、pp.15-17
牟方君2013「南海神廟國家祭祀的緣起於肇始」『廣東航海學院學報』、pp.23-26
馮金磊·胡春梅2014「南海神廟對各層次群體所體現的多重意義」『廣州航海學院學報』、pp.42-45
趙磊2015「唐韓愈撰「南海廣利王廟碑」研究」『嶺南師範學院學報』第36卷第5期、pp.94-98
黃純艷2016「宋代水上信仰的神靈體系及其新變」『史學集刊』2016年第4期、pp.11-24
高喬子2016「南海神廟與海商」『廣州航海學院學報』第24卷第1期、pp.42-44
孫廷林·王元林2017「論宋代嶺南祠神信仰的新變化」『海南師範大學學報』2017年第一期第30卷、pp.42-44

Research Status and Issues on the Southern Sea God Temple and the Worship of God of the Southern Sea in the 10th-13th Centuries

ZHANG Zhenkang

The Southern Sea God Temple (南海神廟) which located in Canton, has a history of more than a thousand years. The worship of the Southern Sea God (南海神信仰) originating from the Southern Sea God Temple, is also the most popular belief in the Sea-Deity in the Pearl River Delta. On the above subject, a lot of results have been achieved in various aspects like official cult, popular belief, urban history of Canton, and history of maritime exchange. This article focuses on the 10th-13th centuries as a turning point in the history of the worship of the Southern Sea God, summarizes the prior research on the topic related with the Southern Sea God Temple and the belief of the Southern Sea God, and introduces relevant historical material of this topic. Through these attempts, the future prospects for this subject will be predicted.

Keywords: Southern Sea God Temple, Worship of the Southern Sea God, Canton, 10th-13th Centuries